

■ 明けましておめでとうございます

明けましておめでとうございます。平成25(2013)年の初めての会報をお届けします。本年もよろしくお祈りいたします。

■ だんごさげ



横田尻の伊藤一夫さん宅の「だんごの木」です。茶の間一杯の見事なもので、写真ではうまく伝わっていないのが残念です。

このような大きさのものは昭和62、3年からとのことですが、大きなミズキを手に入れるのが大変とのこと。まだまだ続けてほしいものの一つです。(守谷英一)

■ 新年会・高砂・吉凶

丸川二男

この町内の新年会のことである。五十戸足らずのこの集落の新年会は、今の公民館創立以来、ほぼ欠かさず行われてきた。以前は元日だったり、やり方や中身に多少の変化があるものの、いわゆる「三福一対」といわれる謡も謡ってきた。

そうした中で縁起を担ぐ人にいわせると「今年は新年早々いいことがない」という。訳を聞くと新年会の最中に床の間の掛け軸が落ちたり

して、先行きが危ぶまれるというというのである。そういえば公民館の床の間にはたいてい山水の軸をかけておくのだが、この間の新年会の時は、地区のお祭りの時だけにかけるはずの皇太神宮の掛け軸をかけていた。それで神様が「ここはおれの居場所でない」と怒ってあばれたのだと、話に尾ひれがついたらしい。その人に言わせると、「高砂」を謡う席なのだから、どこかから借りてきても高砂か富士山の軸をかければよい・・・ということらしい。

謡曲はこのあたりでは祝謡として結婚式や新宅、年祝い、それに新年会など、めでたい席でその場に居合わせた人が声を合わせて謡っているものである。特に男の人は謡えないと「一丁前ない」といわれていた。特に「出し」として初めの一節を謡う人は、「一人謡いできないものは出せない」といわれてきた。みなが謡い継いでくれないと、終わりの方は声が細くなって途中で切れるからである。

このあたりで謡われているのは金剛流で米沢の方から伝わり、東高玉の児玉家で教えたものが伝わっているという。児玉家は既に別の人の管理化にあるので確かめられないが、現在八十歳くらいの人は先ごろまで住んでおられた忠衛氏の父親に習ったという。

昭和五十年代の半ば頃だったか、謡える人が少なくなったとかで忠衛氏を招いて公民館で毎晩五日間習い覚えたこともあった。それから随分な年数もたって、このところ人の後からついては行けるが、一人では自信がないという人が多くなってきたのである。

そもそもなぜにこのようなものを謡うのか。謡曲の「高砂」は相生の松から夫婦の和合と長寿を祝し、更に和歌の道の繁栄と国の平安を寿ぐ。また、「鶴亀」は「鶴は千年 亀は万年」のいわれを元にして長寿とこの世の泰平を祝うものである。従って裏を返せば、いずれも平穏な生活と無病息災を祈念することになるだろう。「松」は一年を通して緑濃く、精気にあふれているだけでなく、吉報を「待つ」という意味を

かけている。

しかしもうすでに「高砂」が何か、その意味や形も茫々と霞んでしまった私たちの日常である。単に「例年どおり」や「いままでやってきたから・・・」というだけでは説得力がなく、伝統や歴史などを口にしてもむなしい感じがする。だが一方では、そういつてしまえば古峰原様に火伏せを祈願するのも、村の鎮守への初詣も、何か空々しくなるのだが、物みな形からであり、形のないところには精神もないと、ニワトリが先か、卵が先かのような話になってしまう。

もう少し理屈っぽくいえば、なぜ新年会に「高砂」を謡うのか、更にいえば、なぜ新年はめでたいのかということになる。これにはいろいろな説明のしかたがあるだろう。クリスマスから除夜の鐘をへて初詣にいたる時間の中には、ふだん宗教と縁のないものもどこかで宗教的施設に出入りし、その雰囲気に触れる機会があるだろう。その中でも新年は洋の東西を問わずカウントダウンなどしてはその瞬間を祝い、人はみな喜びを分かち合うのである。

新しいものを好むのは食材では新鮮なものや初物を特別なものとして扱い、まずは神棚や仏前に上げたりするところにも現れている。そこには常に「新しいものには力が宿っている」とする考え方があつた。新米、新酒、新茶、若水、若潮、若菜、若松、初日、初穂、初夢、初鰯など、数えれば新しいものに対しての期待や願望がいくつもの言葉になっている。その背景には古代中国の神仙思想や道教なども影響し、謡曲の「高砂」や「鶴亀」などはその延長線上にあるのだろう。こうしてみると、たかが謡のこともいろいろな背景と広がりをもっていることがわかる。

さて今後のことである。最近是一同に集まった者が改まって同じ歌を歌うという機会がめっきりなくなった。歌える歌がなくなったせいだろうか。例えば仮に次のような設定をした場合、人はどれを選ぶだろうか。

- 1、日の丸を掲げて「君が代」を歌う。
- 2、日の丸と町旗を掲げて「町民歌」を歌う。
- 3、日の丸を掲げて「われら愛す」を歌う。
- 4、高砂の軸を掛けて、「高砂」を謡う。
- 5、何も歌わない。

こうしてみるとやはり、何かの機会に強いられて歌う一番目以外は、いままで通りに「高砂」を謡うというところに落ち着くのではあるまいか。

つまり、我々のまわりにある多くの年中行事や習慣はたいていが単なる縁起かつぎや語呂合わせだったり、神仏の加護の中身も今となつては意味不明のままに続けているところが多いのである。そのことを前提にすれば、新年会のあれこれも、それほど目くじらを立てることはないのかもしれない。

■ 研修会の案内

例年この時期には研究発表会を開催しておりました。今年度は6月30日に平吹利数氏を講師にして、石造文化財悉皆調査の報告をしていただき、研究会を開催しました。それで、この時期の行事がなくなつてしまい、寂しい感じがしましたので「研修会」を開催し、明年度の事業計画なども話し合いたいと考えました。下記の要領で行いますので、御多用中のこととは存じますが、会員各位に参加いただきたく御案内申し上げます。

- 1 日時 平成25年2月24日(日)
午後2時から
- 2 場所 中央公民館 いこいの間
- 3 内容

(1) 町史編纂の現状報告

町史編さん室 渋谷敏己 副室長
執筆者 守谷英一 本会会員

(2) 来年度の事業について

(3) 懇親会 会費2,000円

懇親会の参加申込は、恐縮ですが準備の都合がありますので、19日(火)まで教育委員会高橋さんへお伝えください。